HOME

三重県総合文化センター情報誌

vol.107 2014 12 1 2 2015

イベントインフォメーション
2014年12月～2015年2月
三重県総合文化センター
主催事業のお知らせ

インタビュー

日本センチュリー交響楽団
首席指揮者

飯森範親
Norichika Iimori

© 山岸伸

おかげさまで、開館20周年。
「ありがとう」そして
これからも「よろしく」

今年4月から日本センチュリー交響楽団で首席指揮者に就任され、ますます注目が集まる飯森範親さん。来年2月に行われる三重特別演奏会についてお話を伺いました。

――日本センチュリー交響楽団（以下センチュリー）首席指揮者就任おめでとうございます。全国のオーケストラで指揮を執られていますが、センチュリーはどのようなオーケストラですか?

ありがとうございます。センチュリーと4月から約6ヶ月一緒にやってきて、とにかく驚かされたのは順応力の高さですね。これはオーケストラのポテンシャルの高さが大きく影響していると思います。センチュリーは25年前に大阪府のオーケストラとして誕生しました。その時に選ばれたコアメンバーは世界的にみても高い水準の人々が集まっています。当時は何人もの外国人の方がいらして、とても国際色の豊かなハイレベルのオーケストラとしてスタートしたのですよ。その伝統が続いていて、こういったハイレベルの方々が団員にいると、その後にオーディションで新しい人を入れようと思うとき、耳も目も厳しくなりますよね。ですから後から入団した若いメンバーも世界でも通用する日本の中でも非常に高い水準の方ばかりです。

古典派のアプローチを例にあげれば、山形交響楽団（以下山形響）でモーツァルトの交響曲の全曲演奏・全曲レコーディングをやってきたこともあり、私自身も演奏法にはかなりのこだわりがあるのです。それをセンチュリーの皆さんにもやっていただこうと思って、6ヶ月間やってきましたが、本当に順応が早い。センチュリーが日本のオーケストラのトップ水準にあるからですね。

――今回でセンチュリーとしては4回目の三重公演となります。毎年演奏を聴くたびにパワーアップしていますよね。

いろんな意味で伸び代があるオーケストラだと思います。やはり大阪府の運営から離れたことによって、意識が変わりました。それは理事会の中でもそうかもしれないし、事務局員の方々もそうだし、当然オーケストラのメンバーも。今まで当たり前だったことが、当たり前じゃなくなってしまったわけなので。だから彼らとしても、何とかしないといけないという意識が、団員一人一人の中で芽生えていますし、これは大きなことですよね。

――今後日本センチュリーとはどのような演奏活動を行っていきますか。

実は来年からあるキャッチコピーを掲げてセンチュリーを売り出します。そんな中で大きく3つのことを考えています。まずは来年から大阪のザ・シンフォニーホールで金曜日・土曜日の2回公演をやるんです。金曜日は夜の公演。お客様は仕事帰りの人をターゲットに。そして土曜日は主婦層。それもちゃんと夕飯の準備が間に合うような時間帯でやります。違った客層を狙い、もちろん内容をちょっとずつ変えてと考えています。

そしてハイドンの交響曲を全104曲やります。通称〝ハイドンマラソン〟と呼んでいて、これをまずはクラシック専用ホールのいずみホールの定期で考えています。プログラムもハイドンもしくはハイドンにゆかりがある人でやってしまおうと。来年はハイドンとベートーヴェンで2回くらいかな。これはオーケストラの古典派音楽へのシンパシーがもっと高くなってほしいと考える中で、自分が山形響と8年間かけてモーツァルトをやってきたことでオーケストラのアンサンブルが格段に飛躍したことも影響しています。すでにセンチュリーは素晴らしいオーケストラだけれども、さらにブラッシュアップするにはハイドンがとても良い選択じゃないかなと思って。

まだあるんですよ。全く違った客層を取り入れるコンサートをセンチュリーの主催事業としてやります。これはA・B・Cと3つのラインを決めていて、Aラインは「センチュリーの定期会員、そして非常にクラシック音楽に対しコアな接し方をしていらっしゃる人」を対象に、センチュリーじゃないとダメだという人へのプログラミング、コンサートの魅せ方を意識します。Bラインは「絶対センチュリーじゃないといけないというわけではないけれど、指揮者・曲・ソリストなど、これだったら聴きたい」と思う人たちをターゲットに考えています。そして、Cラインは「全くクラシックを聴かないという人」を対象にしたライン。その人たちにはクラシックではないジャンルとのコラボレーションをすることで、オーケストラサウンドに興味をもってもらおうと考えています。内容はまだオフレコですが、来年3回は主催事業としてやろうと思っています。こういうことを打ち出していくので、地方でもクラシックだけじゃなくて、Cラインのプログラムもやっていきたいですね。

――飯森さんが就任されて、オーケストラが本当に次のステップへ動いていますよね。

わたしの中で本当にオケのメンバーのここが良いなと思うことがあって。団の運営が非常に厳しい期間があったけど、その期間に自分たちができることや、可能性を探って。それが結果的によかったかなと思う。今日のコンサートを上手くやらないと次が無いって意識を必ず持ちながらやっているんですよ。すごく大きいことですよね。音楽家は助成金を頂いて演奏するのではなくて、自分たちが演奏した対価を頂くのがあるべき姿な訳で。自分たちがコンサートで演奏して、主催の方々から報酬をいただいて生活ができているという意識を団員が持たないと、今後のオーケストラは絶対にダメですね。

――三重公演についても伺いたいのですが、飯森さんからみる今回のプログラムの印象・聴きどころを教えていただけますか。

バッハに関しては、この4年ぐらい、森悠子先生というフランスで長く演奏活動をされていた桐朋学園大学の大先輩と一緒にセミナーをやらせていただく機会がありました。森先生はフランスバロックの大家といっても過言ではない方で、今は若い方々にフランスバロックの奏法を伝えていらっしゃるんです。私も彼女とご一緒させていただく中で勉強になるし、また森先生も私の古典のアプローチに非常に共感を示してくださり、一緒にいろんなことをさせてもらっています。このノウハウを元に、センチュリーの中でも古楽器を演奏される方々がいらっしゃるので、その方々のノウハウとも上手く戦わせながら、独自のバッハをやろうと思っています。先日もブランデン（※1）の5番を演奏しましたが、そのままCDで販売できるぐらいに素晴らしい演奏でした。音符が話をしているような、バッハのメッセージが伝わるような演奏になると思います。ベートーヴェンは20世紀末にベーレンライター版という、ベートーヴェンの直筆譜に近い版が出版され、それに出会ったことで180度近く見え方が変わったと言っていいほど共感を覚えました。それからは、ドイツでレコーディングをしたり、様々なシーンで演奏させていただくようになりました。ボーイング（※2）に関しても、森先生に出会ったこともあって、第九を演奏した時には少し拘ってやってみました。今回の7番に関しても、鋭いリズム感を上手くボーイングの工夫で表現し、さらにセンチュリーの魅力として伝えられたらと思います。

――共演する萩原さんは三重県文化会館で2度目の登場です。飯森さんから見る萩原さんはどのようなピアニストですか。

彼女がジュネーブのコンクールで優勝し、日本で最初のお披露目コンサートをしたときに初めて共演しました。そのあとも何度か共演していますが、いつも平常心でリラックスされていますね。だからこそ聴いている人たちをリラックスさせる演奏ができるのかなと思いますね。

――今回萩原さんと共演するグリーグのピアノコンチェルトの印象はどうですか。

絵画みたいな曲ですよね。グリーグの生まれた北欧は、季節のほとんどが夏と冬しかなくて、春と秋は季節の間に1～2週間ぐらいしかないのに、その間のできごとを上手く、ピアノコンチェルトの中に盛り込んでいる印象があります。

――三重県の印象はいかがですか。

昨年、松阪市に演奏で伺いました。三重県出身の知り合いが何人かいますが、みんな声を揃えて何もないとおっしゃるんですよ。だけど、松阪まで電車で移動したんですが、海と山の自然が本当に魅力的な県ですよね。東京オリンピックの開催などにより今後地方、地域はこれから見直されてくると周りからも聞きます。そういったタイミングの時に、その地域の魅力をいろんな部分で出していくことをぜひやってほしいと思いますし、センチュリーもそういったことに貢献できればといいなと思いますので、ぜひともよろしくお願いします。

――最後に三重県文化会館のお客様へ一言お願いします。

三重県文化会館には初めて伺います。今回だけではないはずなので、当日いらっしゃるお客様にはセンチュリーの様々な魅力を垣間見ていただけたらと思います。そして、今後も三重県文化会館のスタッフといろんな話をしていきながら、皆様のお友達を誘いたくなるようなコンサートをお届けできるようにしていきたいと思います。今回来ていただいたお客様には100%、いや120%満足いただけると確信しているので、ぜひ楽しみにいらしてください。

※1 ブランデン… ブランデンブルク協奏曲のこと。J.Sバッハが作曲した6曲からなる合奏協奏曲。

※2 ボーイング… ヴァイオリンやチェロなどの弦楽器の弓の扱い方のこと。弓の使用部分と使い方によってさまざまな種類があるが、手元から先に毛を使う方向をダウン、逆をアップと言う。一般的にダウンを強拍に、アップを弱拍に用いることが多い。

公演情報

キャ 学割10

日本センチュリー交響楽団 三重特別演奏会

指揮:飯森範親　ピアノ:萩原麻未
平成27年2月22日（日）15:00開演（14:15開場）
三重県文化会館　大ホール
全席指定　S席4,500円、A席3,500円、B席2,500円
問 三重県文化会館チケットカウンター 059-233-1122